学校自慢

学校支援地域本部事業を核とした学校づくりの推進

千葉市立磯辺中学校長　増澤（ますざわ）　保明（やすあき）

1　はじめに

本校は，平成25年度４月に磯辺第一中学校と磯辺第二中学校の生徒数減少に伴う統合により，千葉市60番目の学校として開校した。５年目を迎えた今年は，生徒数514名(14学級)で教育活動を進めている。本校の生徒は学校内外で，諸活動への意欲的な取組を見せている。特に昨年度野球部においては，夏の総合体育大会で全国ベスト８まで勝ち上がる健闘を見せた。その勢いは今年度にも引き継がれており，学校全体が活気にあふれている。

2　学校支援地域本部事業の発足

本校では，**図**のように平成26年度４月に学校支援地域本部事業が発足し，今年で４年目を迎えている。学校からの要請は，磯辺中学校地区地域教育協議会を経て，地域の関係団体，ボランティア等に依頼する。調整には，地域コーディネーターが貢献している。なお，本事業は，磯辺小(H25)，磯辺三小(H28)でも実施しており，まさに磯辺中学校区全体で学校・家庭・地域が一体となって，地域ぐるみで子どもたちを育てる体制が整備されたと言えよう。

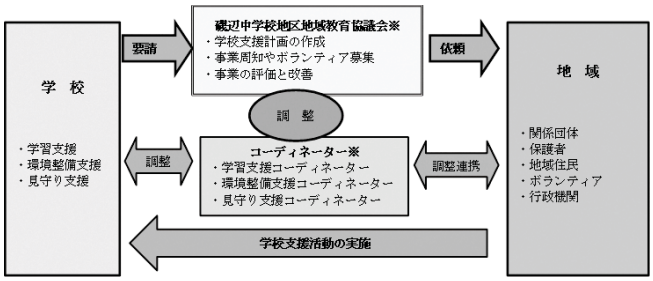

図　磯辺中学校地区学校支援地域本部事業

3　地域による学習支援等の活動

本事業において，実際の学校支援は地域住民から選任された地域コーディネーターが中心となり，学習支援，環境整備支援，見守り支援などの学校支援活動の調整を円滑に進めている。

4　学校支援活動の紹介

平成28年度における学校支援活動の実績を具体的に紹介する。

(1)学習支援

①放課後学習（数・英：週１回）
　参加生徒数のべ126名：講師４名の支援
②まちづくり推進事業
　海岸清掃・福祉体験等：61名の支援

(2)環境整備支援

①樹木剪定・除草作業：70名の支援
②校内トイレ清掃：30名の支援

(3)見守り支援

小学校のセーフティウォッチャーと連携しての，毎日登下校時の見守り支援

5　成果と今後のこと

本事業により，地域人材の活用によって，よりきめ細かな個に応じた指導が推進できたことや，地域や保護者の支援を得て教育環境が整った。これにより，教職員が教育活動に更に専念できるようになってきた。

統合５年目を迎えた本校にとって，本事業は大変有効である。これからも保護者・地域の方々と共に，歩んでまいりたい。

提言

郷土芸能（佐原囃子）伝承による人間形成

佐原囃子上仁會代表　浅野　仁志

1　はじめに

千葉県香取市佐原地区で行われる佐原の大祭は７月の八坂神社祇園祭，10 月の諏訪神社秋祭りの総称をいい，関東三大山車祭の一つと称され，約 300 年の伝統を有します。この祭に 24 台の山車が曳き廻されその山車に乗って演奏されるのが佐原囃子です。佐原囃子の起源は古く江戸時代に遡りますがそのころ頻繁に交流のあった江戸文化の影響を受けながら，佐原の祭りと共に発展して今の形態になったのが江戸時代の 1810 年～ 1830 年頃とされています。その様な背景の中で，香取市民の念願でもあった「山・鉾・山車行事」と呼ばれる山車が巡行する日本の祭 33 件が国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産に平成 28 年 11 月 30 日に登録されたことは大変喜ばしいことです。

佐原囃子で使用する楽器は大太鼓，附け締め太鼓 (小太鼓)，大鼓，小鼓，笛，鉦（かね）の 6 種類あり，大鼓と小鼓で調子（指揮者役）をとっています。特徴的なのは大鼓と小鼓が入っている点で，祭囃子としてはあまり他に例をみません。また，楽器ではないのですが演奏中の曲と曲の繋ぎの掛け声は流派により異なりますが佐原囃子独特のものであり，この掛け声がないと曲として完成しないとも言えるくらいに重要な楽器の一つと言えます。佐原地区では囃子方を下座（げざ）と呼んでいます。下座連は 13 ～ 15 人位で構成され，内訳は大太鼓１人，小太鼓１人，大鼓１人，小鼓４人，笛７人，鉦１人です。お囃子の技術向上は曲を表現する際に大事な事で，常に上を目標にもって稽古することが肝心です。それと同じ位大事なことが場に合った選曲です。いくら上手に演奏しても場に合わない曲だったら台無しです。山車は動く舞台，同じ場面はありません。場所，曳き手の気持ち，観客等，一期一会の場面を素早く察知して曲を選定します。実はこれが下座師にとって一番難しく，面白い所でもあります。曲が場にハマると山車と曳き手とお囃子が一体となり見ていて思わず引き込まれすばらしい場面が演出されます。山車の動きに合わせて，多くの曲の中から一曲を選び出し，いかに山車の動きを写りよく見えるよう演奏するかが下座連としてセンスが問われ，遣り甲斐もあります。

曲目は，「役物（やくもの）」「段物（だんもの）」「端物（はもの）」の３種類に大きく分かれています。「役物」は，儀式的な曲で山車の曳き出しや，山車の曳き納めの時に演奏する曲目です。「段物」は，これぞ佐原囃子ともいうべき曲で，優雅でゆったりとした，尚且つ格調のある曲目です。一番の見せ場や大通りなどで山車がゆっくり曳き廻される時などに演奏されます。「端物」は，道中や踊りの時に演奏される曲で格調のある曲から時代時代のはやり歌や民謡等を取り入れたお遊びの曲まで幅広い構成になっています。柔軟に取り入れる姿勢は佐原囃子が現在も発展途上にあるのかも知れません。そのような経緯から曲数が多いのも佐原囃子の特徴で 40 曲以上になります。

さて今回，佐原囃子と共に歩んできた人生の中で，今は亡きK師匠から稽古及び日常何気ない会話から強く脳裏に刻まれた言葉を振り返り，私の提言とします。

２　佐原囃子の伝承

下座連は，昭和初期頃の旧佐原町内には無く周辺の集落で引き継がれてきました。伝承者は，地元に定着させるという意味から農家の長男に限られていたようです。50年ほど前からは佐原地区や隣接地域にも愛好者による下座連が結成されるようになりました。狭い地域での結成なので同じ流派に偏る傾向がみられ，私の所属する流派がその一つになりますが，他の流派の発展を願うばかりです。伝承方法としては，民族行事や芸能などその行為が伝承されていくことを行為伝承というのに対し，神話や叙事詩，伝説など口頭で伝承されるものを口頭伝承もしくは口承と言われています。K師匠からは「口伝（くでん）」と聞かされており，楽譜や手本になる音源があるのにも関わらず発声で言えないリズムは実際に楽器を使用しても思惑を加味した演奏にはならないと指導されてきました。やはり小節と小節の間（ま）や笛などの細かい指裁きなど，一番大事な曲趣を受け継ぐには，やはり「口伝」に頼る他ありません。楽譜や音源だけで勝手に解釈してしまうと別物の曲になる危険があります。

３　佐原囃子の稽古による教育効果

私が佐原囃子を始めたきっかけは，父親の実家である香取市と隣接している茨城県稲敷市の上須田地区で結成されていた上須田下座連（昭和初期から昭和51年まで活動）に私の父，祖父や叔父が在籍しており物心ついた頃から稽古場に連れて行かれ，祭礼中には山車の隅に乗り込み演奏を聞いていたこともありその影響で小学校４年生から郷土芸能クラブに入部，中学生からは部活動として本格的に佐原囃子を学び，地元の下座連に入り，K師匠と出会うこととなり，お囃子の技術だけではなく，お祭りの習慣や下座師としての礼儀作法等も教わりました。特に稽古中の正座はとても辛く足の痺れが気になり，稽古に集中ができないこともありました。正座は，元々日本古来の坐り方で正座が私たちにもたらしてくれる健康への効能もあり，忍耐力もつき，正座が習慣になることで痺れや痛みがない正しい正座が無意識に身に付くことができました。また，K師匠からは将来，佐原囃子を指導する立場になったときに人に伝える難しさの壁にぶつかり，それを乗り越えるために指導方法を研究して稽古のたびに何度も指導方法を変えて伝承していかなければならなく，幹の部分は変えずに教える方法が身に付くまでには相当の年月がかかるものであり，技術面だけではなく人間としても成長することで，伝承者の一人として，「侘び寂び」が分かってくるものと教えられました。大人でも子どもでも指導の仕方は同じであり，同じ境遇の中で切磋琢磨して上達の伸び幅が大きくなるのが中学生頃であり，私自身もこの時期が人間形成の基礎を作る上でとても重要な時期であると感じています。そしてK師匠の教えの中でも印象に残っている言葉が「TPOを考え，臨機応変にやれ」です。

４　おわりに

香取市佐原地区の各学校では，部活動の他に下座連の稽古に顔を出すようになり，本格的な稽古が始まります。将来何人の下座師が誕生するかとても楽しみです。私の息子も小学校４年生から上演しており，将来伝承者の一人として同じ道を歩んでいくことに期待したいものです。佐原囃子は聴けば聴くほど人の感情に入り込める不思議な力があります。学校教育も様々な研究がなされていることと思いますが，更に夢中にさせる学習方法の向上に期待すると共に，益々の千葉県教育の発展を願います。